

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	小田麟太郎
論文題目	時代と絶対—ジャン=リュック・ナンシーのポスト脱構築的实在論		
（論文内容の要旨） 本論文は、現代フランスの哲学者であるJ.-L. ナンシーの思索の歩みを規定し続けた根本問題を剔抉し、これに対する応答の深化の過程として、彼の思想の変貌を統一的に解釈することを試みるものである。その際、この解釈を終始先導するものは——本論文の題目が示している通り——「絶対的なもの(absolu)」と「時代(époque)」という二つの観点である。 本論文は二部に分かたれる。第一部は三章からなり、その狙いはナンシーの前期思想（一九八〇年代～一九九〇年代初頭）の分析を通して、彼の思索の主題——すなわち＜有限な思考とその外部に存する絶対的な「物」＞というそれ——を解明せんとするところにある。 初めに第一章では、ナンシーの前期思想を代表する著作である『無為の共同体』が取り上げられる。周知のように、同書の共同体論は、成員同士が共有し合っている某かの同質性を紐帯とするような——ナンシーの術語を用いるならば「内在主義的」な——共同体のあり方に抗拒する。何となれば、かかる均質的な集団の共同性はその裏面において、異分子を除外する排他性に他ならぬからである。共同体を蚕食する如上の内在主義的な傾向に抵抗する「政治的な」試みの一環として、ナンシーは「書き込み(inscription)」なる言語行為を提唱する。申請者によれば、それはその実、言葉と指示対象との一定の繋がりに基づく通常の意味作用を逸脱する仕方で、言語の外部に存する「物そのもの」に赴かんとする行為たる「外記(excription)」に他ならない。 だが驚くべきことに、以上のように（本来語りえぬ筈である）「絶対的な物」の存在について現に思弁的に語っているにも関わらず、ナンシーは我々の思考がどこまでも有限なものであらざるをえぬことを主張する。すると彼の真意は那邊に存するのか。この疑念を解消すべく、第二章において申請者は先ずナンシーの所謂「絶体的有限性」（乃至は「絶対的自由」）の解明に取り組み、この概念が（如上の＜有限なる思考＞とは異なり、先述した「物」の思惟をも可能ならしむるところの）「自由の経験」に基づく所以を詳らかにし、次いでこの「自由の経験」があくまでも今日の「私たちの時代」に特有な歴史的経験として把握せられるべきものであることを示す。だが「私たちの時代」はそれ自体、根拠を欠いたものである以上、これに依拠する「絶体的有限性」もまた畢竟、無根拠に留まらざるをえぬのである。 しかしながらナンシーは、その無根拠性にも関わらず、この「絶体的有限性」は一つの			

真理であると説く。そこで第三章では、この謎めいた主張の講明を通して、ナンシーの前期哲学における根本命題と独自の時代認識の提示が試みられる。ここで申請者はナンシーによるカントの「定言命法」の解釈、及びこの釈義を通してナンシーが錬磨した「命法的真理」の概念を討究し、その要諦を「普遍的な法が何一つ与えられていない状況下で、我々人間はそれでも尚、無根拠な判断を自由に行わなくてはならぬこと」と敷衍した上で、かかる「命法的真理」が先の「絶体的有限性」に帰趨する次第を明らかにする。そして申請者の見るところ、こうした「絶体的有限性」の真理性を下支えしているのは、「(啻に我々の判断のみならず、「絶対的な物」をも含む) 全てのものは究極的には無根拠である」という——世界の原事実の言表とでも言うべき——ナンシーの命題、及び<根拠律によって統べられた形而上学的思考が今やその限界を露呈するに至った時代>として「私たちの時代」を捉える彼一流の歴史意識なのである。

本論文の後半に当たる第二部は、その主眼をナンシーの後期思想(二〇〇〇年代以降)の究明に置いており、二章から構成されている。まず第四章では、この時期のナンシーの哲学的企図の一つであった「キリスト教の脱構築」を<ハイデガーの思索の発展的継承と批判>として読み解くことが試みられる。すなわち申請者曰く、ナンシーはハイデガーの所謂「存在」の中に、存在自身の実体化に抗う構造を認め、これを「共-存在」(或いは

「存在-自体-共-存在(être-avec-l'être-même)」)として更に一層展開することを目指す一方で、ハイデガーが考える「存在」(或いは「始元(Anfang)」)にはそれでも尚、一種の主体的性格が残存しており、そしてそのことが——<西洋的・キリスト教的主体の自己憎悪>としての反ユダヤ主義の動向とも相俟って——ハイデガーの『黒冊子』における「反ユダヤ的」な言辞の遠因をもなしている事態を摘発するのである。

本論文の掉尾をなす第五章は、主に三つの事柄を討究するものである。(一)ナンシーが後期思想において初めて導入するに至った種々の重要な概念。それは具体的には、「アドラシオン(adoration)」(前出の「外記」を再考したもの)、「世界の中での世界の開放性」(「キリスト教のキリスト教的ならざる核心」と目されるもの)、「実存」(「存在と非-存在との特異な混合」たる「物」の<在って無い>ようなあり方)、「聖なるもの」(上述の「政治的なもの」を食み出す次元)等である。(二)「私たちの時代」を統べるニヒリズムからの脱却を可能にする我々の姿勢としてナンシーが提唱する「持すること(tenir)」の多義性と、ニヒリズムの超克の問題を巡るナンシーと西谷啓治との異同。

(三)時期の前後の別によるナンシーの主張の推移。申請者はこれを「存在から非-存在へ」、「政治的なものから聖なるものへ」、「世界との関係から世界の外部との関係へ」等と定式化しているが、これらは同時に又、本論文の研究の成果を簡潔に約言するものでもある。

(論文審査の結果の要旨)

現代フランス哲学を代表する人物の一人、J.-L. ナンシーは難解にして多産なる思想家として夙に知られている。加之、ナンシーは二〇二一年に没する迄、旺盛に活動し続けていたという事情も手伝って、彼の思想の受容に際して長らく我々は断片的な理解に甘んずるか、然らずんば一斑を見て全豹をトする愚挙に打って出るより他になかったと言ってもよい。しかしながらナンシーの夥しき著作の刊行にも漸く一区切りが付いたと思しき今日、彼の思想の総体的な把握に挑む機運が、専門研究者の間で徐ら醸成されつつある。かかる現況にあって、ナンシーの思想的変遷の全貌を統一的に解釈する試みを逸早く本格的な仕方で敢行した点で、本論文は国の内外を問わず、斯学において未だ類を余り見ぬ新機軸の研究であり、その先見性は大いに評価せられるべきである。

申請者の研究の成果として特筆大書せられるべきは、以下の三点である。

その第一点は、ナンシーの思索の歩みの綜覧に当たって、申請者が変奏曲における「主題と変奏」を彷彿させる「不易流行」の観点を導入しており、そしてその工夫が奏功していることである。以下、この点を少しく説明しよう。申請者の見るところ、最初期から晩近に至る迄、ナンシーの思想を伏流し、貫道している不易のモチーフは、「すべては(究極的には)無根拠である」という命題である(第三・第五章)。そしてかかるモチーフによる終始一貫の嚮導の下で、「思考の外部の世界にあって、それ自体無根拠なる<物>の存在」がナンシーの思索の主題として確立される。だがこの同じ一つの主題を巡って、彼はその時々に応じた様々なる変奏を展開することになる(これが前述の「流行」である)。すなわちナンシーの前期思想によれば、上述の「物」はあくまでも世界において存在する(第一章)。だが後期に到ると、彼は一転して「物」を世界の外に移し置くと共に、その「存在」をも「存在と非-存在との混合」として新たに捉え直さんとするのである(第四・第五章)。以上の如き立論を通して、申請者はナンシー哲学の全体像を明亮且つ説得的に提示することに成功している。

第二に挙げられるべきは、本論文が啻にナンシーの理論的遍歴の整合的解釈のみならず、この特異な思想家と他の諸賢との関係の如何を見定める比較思想的研究にも相応の紙幅を割いている点である。その好例はナンシー自身のカント論(第三章)やハイデガー批判(第四章)の内実の分析であるが、本論文の独自性を如実に示しているのは、ナンシーと西谷啓治の思索の対照である(第五章)。双方の活動時期は近接しているものの、何らの接点もなかったと思しき両者の取り合わせが前代未聞であることもさることながら、当該の究明は——ニヒリズムの問題に対する各人各様の応答の中に見出されるところの——両者の意想外の近さを浮き彫りにしている。このように

本論文は、ナンシーの思想を哲学史に位置づける試みに先鞭を着けた点でも注目に値するものである。

本研究の三番目の（且つ又、最大の）功績は、蓋し以下の点である。申請者はナンシーの中心概念（の一つ）である「有限性」を俎上に上せつつ（第二・第三章）、同時に又「實在論的側面にこそナンシー哲学の核がある」（「はじめに」）という見方を採ることによって、現代哲学の歴史において彼が極めて重要な位置を占めていることを明らかにしている。旧聞に属する事柄であるが、前世紀後半の思潮を規定したもの（の一つ）は、己自身の知の歴史的・文化的被制約性の自覚に徹する＜有限の立場＞からの思索であった。そしてかかる旧来の有限性の哲学――就中、その暗黙の前提たる「相関主義」（Q. メイヤスー）――を真向から否定し、絶対的なものへの知の到達可能性を主張したのが、今世紀になって登場した（思弁的實在論を始めとする）實在論的哲学である。この有限性の哲学と實在論的哲学は両立不可能な関係の中にあると考えられるのが常である。だがこれに対して申請者は、有限性の哲学にして實在論的哲学たるナンシーの思想の両義性の中に、双方の立場が媒介される可能性を見出さんとするのである。これは瞠目すべき卓見であると思われる。

だが他方で遺憾ながら、本論文には本来果たされるべくして未だ果たされていない課題が残されているのではないかという疑念も否めない。なるほど申請者はナンシーの議論の明暢な整理と再構成に成功しているものの、しかしながら更に歩を進めて、当該の議論の理路の是非、及びその論拠の妥当性の如何を批判的に吟味する迄には未だ至っていないように思われる。また申請者は、当該の議論の背景をなしていると推定されうる複数の文脈の輻輳の闡明にも注力すべきであったのではないか。とはいえ、これは素より望蜀の嘆であり、寧ろ申請者の更なる研鑽の成果に俟つべきなのであろう。上来述べ来った理由により、本論文が称賛に値することは、当該論文の調査委員一同の間で意見の一致を見たところである。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また令和七年一月二十八日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当面の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。